

5/29 – Lecture 1.

「ローマ時代からのバラ ～常識から離れてリヨン市を歩き回ってのいくつかの考察」

講師：ジェラルド・ベトリッジ氏

イギリスとフランス両国に在住経験有り。ケンブリッジ大学とフランス国立応用科学院リヨン校で学び、イートン校の物理学教授を務めた。1996年に退官し、その後はリヨン在住。

リヨンは2000年の歴史を持つ。古い劇場から川の合流地点の新しい開発地域まで、驚くべき魅力的な都市である。しかし、その隠された魅力を探し出すには時間がかかる。何年も前からその虜になっている英国人、ジェラルド・ベトリッジが世間の常識から離れて、この町の真髄を見つけ出す旅にあなたたちをご案内する。

2つの川、ローヌ川とソーヌ川の間にひっそりとたたずむ中世のデネイ修道院から橋を渡るとそこは、リヨン旧市街、何世紀もの間ほぼ無傷で残されたルネッサンスの地域である。そこでは traboules と呼ばれるこの地域特有の小道が建物を抜け、道と道とをつないでいる。建物は4階建て、または5階建てで、中庭や美しい階段と中二階があり、その多くは当時の重要な交易相手だったイタリア人の影響を示している。

続いて向かうのはフルヴィエールの丘。丘の頂上はローマ人が紀元前1世紀に、3人のガリア人の首都として都市を築いたところである。世界大会の会場からそれほど遠くないところで、ローマ時代の古い劇場や水道橋を見ることができる。フルヴィエールのノートルダム大聖堂と、トマス・ベケットに捧げられたチャペルもそこにある。

次に行くのは、この地方の著名人が埋葬されたロワイヤス Loyasse 墓地への葬式行列が通った道である。そこからはソーヌ川の息を飲むような風景と北の眺望を楽しめる。坂を下り再び川を渡ってクロワ・ルッスへ向かうと、彼はその途中で美しいけれどうまく隠された公園をどうやってみつけるか見せてくれるだろう。フルヴィエールが『祈りの丘』であるならクロワ・ルッスは『仕事の丘』、たくさんの絹織物職人の丘である。何世紀にも渡って、絹産業はこの地域の主要産業であった。

そして最後に最もリヨンの段々を降りてローヌ川の土手に立ち、テットドール公園と有名なバラ園でこの旅は終わる。

これは、ローマ人からバラまで、リヨンを文化と建築と絹と美食とバラの都市として有名にしている歴史的に重要な遺産の道をたどる旅である。

(補足説明)

• ガリア

古代ヨーロッパ西部のケルト人居住地域を指すローマ時代の呼称。現在のフランス、ベルギーの全土。オランダ、ドイツ、スイス、イタリアの一部を含む。カエサル（シーザー）に征服されローマ領となる。

ローマ帝政期アウグストスがガリアを 3 つの元首属州（ルグドネンシス、ベルギカ、アクィタニア）に分け、ルグドゥヌム（リヨン）を統治及び元首礼拝の中心地とした上、全ガリアの属州会議の開催地とした。

尚、都市の起源はフルビエールの丘にローマの植民都市ルグドゥヌムが建設されたことに始まる。

ルグドゥヌム→ケルト語でルゴス神の砦（丘）